

鳥取県における主要栽培ナシ品種のナシ黒星病に対する 品種間差（葉）

1 情報・成果の内容

(1) 背景・目的

ナシ葉におけるナシ黒星病の発生量には品種間差があることが知られているが（梅本1993）、‘新甘泉’をはじめとする県オリジナル品種においてそれを検討した事例は少なく、知見が乏しい。そこで、それらのナシ品種を中心に接種試験を行い、葉における品種間差を明らかにした。

(2) 情報・成果の要約

- 1) 葉におけるナシ黒星病の発生量には品種間差が認められた。
- 2) 本病に対するナシ葉の感受性は、高い順に‘幸水’≒‘新甘泉’、次いで‘なつひめ’≒‘秋甘泉’、‘夏さやか’、‘おさゴールド’であった。

2 試験成果の概要

- (1) 2016～2018年にポット苗または高接樹の側枝を用いて、ナシ黒星病の分生子接種を行い、接種の31～43日後に実施した程度別の発病調査の結果から発生量を比較した。
- (2) 統計解析の結果から発病葉率は、‘幸水’と‘新甘泉’で同程度に高く、次いで‘なつひめ’と‘秋甘泉’で同程度に認められ、‘夏さやか’ではやや低く、‘おさゴールド’は低いと考えられた（図1）。
- (3) 発病度の調査結果においても、発病葉率と同様の傾向が認められた（図1）。

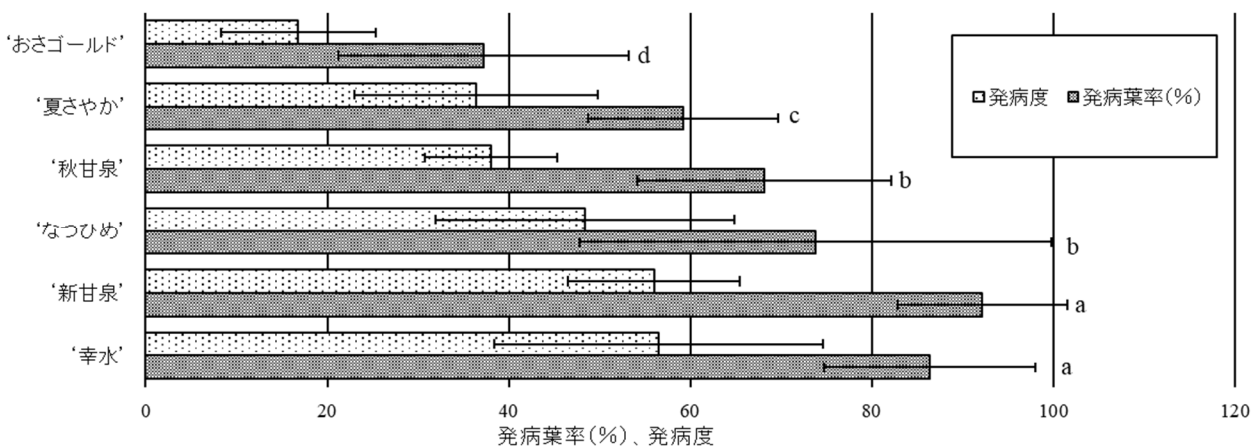


図1 接種試験によるナシ黒星病の発生量（葉）

試験数 (N) は‘おさゴールド’及び‘新甘泉’は3、‘夏さやか’、‘秋甘泉’及び‘なつひめ’は4、‘幸水’は5である。エラーバーは標準偏差を示し、統計処理はライアン法による多重比較で5%水準の有意差があることを示す。

3 利用上の留意点

- (1) 本試験は葉における結果であり、感受性の評価は供試品種内での比較である。
- (2) ‘新甘泉’は果実においても感受性が高い（高感受性となる期間が存在する）ことを確認しており、防除対策の必要性が高い品種と考えられる。

4 試験担当者

環境研究室 研 究 員 山田 高之
環境研究室 室 長 中田 健※
※現 農業振興監経営支援課農業普及推進室
環境研究室 室 長 田中 篤※※
※※現 東部農林事務所八頭農業改良普及所